

白川研究所便り



白川静著『漢字の体系』

目次 ◆ index

三国時代の「大疫」と今	芳村 弘道	2
白川静先生生誕一一〇周年記念講演（土曜講座） および企画展示の開催について	芳村 弘道	3
漢字学研究会活動報告	大形 徹	6
日中韓漢籍研究プロジェクト報告	芳村 弘道	7
日本文献研究プロジェクト報告	杉橋 隆夫	9
二〇二〇年度「連続公開講座」	高島 敏夫	10
教育活動報告	後藤 文男	10
文化事業活動報告	久保 裕之	12
「第十一回創作漢字コンテスト」	加地 伸行	14
十年目を迎えた「漢字教育士」の活動	久保 裕之	15
白川静博士『漢字の体系』	芳村 弘道	16

第15号

発行

21.3.31

立命館大学
白川静記念東洋文字文化研究所

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
電話 075-465-8006(事務局)
Mail ro-toyo@st.ritsumei.ac.jp
URL <http://www.ritsume.ac.jp/acd/re/k-rsc/sio/index.html>

三国時代の「大疫」と今

所長 芳村 弘道



二〇二〇年は中国湖北省の武漢から起こった新型コロナウイルスの感染症が瞬く間に世界を覆い、疫情に苦しめられた一年であった。その武漢から、長江を溯ったところに『三国志』などで名高い古戦場の赤壁がある。曹操の率いる

魏軍が孫権の呉と劉備の蜀の連合軍に大敗を喫したのが、建安十三年（二〇八）の冬、ここで行われた赤壁の戦いであった。陳寿の『三国志』「武帝（曹操）紀」には、その年十二月のこととして、「公、赤壁に至り、備と戦い利あらず」と記載される。続いて「是に於いて大疫ありて、吏士、死する者多く、乃ち軍を引きて還る」とあって、赤壁の大敗は、『三国志演義』などにもいうところの火船の計によるだけでなく、魏軍に蔓延していた疫病の影響を大きく受けたものであった。赤壁の戦いの結果によって、魏による統一は不可能となり、三国鼎立の態勢が定まったとされる。いわば「大疫」が歴史を左右したのであった。

赤壁の戦いの建安十三年十二月は、新暦に換算すると、二〇八年十二月二十五日から二〇九年一月二十三日に相当し（翌月は閏十二月）、大戦は厳寒のころに行われた。『三国志』がいう「大疫」がいかなる伝染病であったか明らかではないが、季節上的一致から、昨年に起こった感染症と類似の疫病という想像に駆られてしまう。ネットを検索すると、中国の「今日武漢之疫」与赤壁之戦時之疫同（作者は呉名崗。「山東孫子研究会」ホームページ「兵道網」掲載 sunzistudies.com/

shownews.asp?id=357、2021年1月25日閲覧）という記事があって、やはり同じ思いをする人がいた。

三国時代は建安十三年だけでなく、しばしば「大疫」に見舞われている。建安二十二年（二一七）には魏の都に起こり、曹操や子の曹丕（魏の文帝）・曹植のもとに集った文学の士、いわゆる「建安の七子」のうち徐幹・応瑒・陳琳・劉楨（他の三名は先に死去）が罹患して一時に死去した。建安時代の魏において、創作詩が起り、儒家的倫理観の束縛を解き放って、文学はそれ自身の意義を有すると自覚される画期がもたらされた。三曹（曹操父子）や「建安の七子」の文学的営為については、白川静博士の『中国の古代文学（二）』（中央公論社版。また『白川静著作集』第八卷所収）の第五章「建安の文学」に詳しく、そのなかで博士は、建安の詩は「いかに運命を生きるかを主題として展開し」（中央公論社版二二二頁）たことを論じられている。後漢末の争乱を生きる彼らは、また「大疫」という過酷な情況にもおかれ、己と人の運命を見つめて文学の創作に向かつてゆき、「建安の文学」という中国文学史上に輝く成果を生み出したのであった。

いうまでもなく現在の「大疫」は、地球規模の災厄をもたらし、人類の歴史を変えようとする勢いを見せている。しかし、この災厄を経て、「建安の文学」のような成就が必ずや社会の各分野に生まれるに違いないと信ずるものである。当研究所のこの一年間の活動も計画通りに進まなかったが、来年度からは新たな五カ年計画をたて、困難な情況のなかで、より良き成果を挙げてゆきたく期している。大方の御教示と御支援を偏に御願います次第である。

（立命館大学特任教授）

白川静先生生誕一一〇周年企画について

特別講演会―立命館土曜講座―

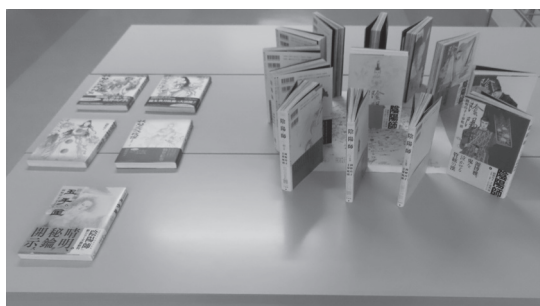
「歴史の謎を解く鍵としての白川文字学」岡野玲子 漫画作品の制作から」

二〇二〇年九月二十六日（土）、立命館土曜講座が開催されました。今回の土曜講座は白川静先生生一一〇周年記念として、漫画家の岡野玲子氏を講演者としてお招きし、「歴史の謎を解く鍵としての白川文字学」岡野玲子 漫画作品の制作から」というテーマで講演していただきました。

岡野氏が執筆された漫画「陰陽師」は、平安時代に実在した天文博士安倍晴明を主役とする物語です。当日は、会場のスクリーンに「陰陽師」に登場する実際の場面を映し出しながら、物語の元となった当時の時代背景や陰陽道の考え方などについて解説いただきました。また、これらを調べる上で、白川文字学・白



講演中の岡野玲子氏



岡野玲子氏作品の特設展示

川博士の著作物からいかに示唆を得たか、漢字の成り立ちの姿と意味の多重性の魅力についてご説明いただきました。その中で、二〇〇一年に別冊太陽「白川静の世界」で白川博士と対談された際のエピソードについてもお話しいただきました。

会場ロビーでは、岡野氏の作品である漫画「陰陽師」全十三巻が陰陽道で用いる羅盤の上に並べて展示されました。また、講演会の隣接会場では、白川静先生一一〇周年の特別展示も開催され、白川先生の学問の歩みと栄典の数々を来場者の皆様にご覧いただきました。今回は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、定員を百名に限定しての開催でしたが、講演中は皆さまで興味深く耳を傾けておられ、講演後も岡野様への質問を希望される方が列を作るなど、大変好評をいただきました。



会場の様子

白川静先生生誕一一〇周年記念展示

「白川静博士の学問と生涯―新寄贈の資料類を中心として―」

本学の卒業生であり、名誉教授であられた白川静博士（一九一〇—二〇〇六）は、中国最古の文字資料である殷・周の甲骨文・金文を研究して漢字の体系的な研究を行い、またわが国と中国が東アジアにおいて文化的類型性をもつという視野に立ち、日本と中国の古代文化に関する広範かつ独創的な研究成果を世に問われ、「白川学」と称される学問世界を築られました。二〇〇四年には、その功績が認められ文化勲章の榮譽を受けられました。

二〇二〇年は、白川静博士の御生誕一一〇年に当たります。そこで、これを記念する展示を開催することにいたしました。今回は、平成三〇年（二〇一八）九月十二日に博士の御遺族が本学白川静記念東洋文字文化研究所に寄贈された博士遺蔵の書籍・資料類一〇二二点のうちから、手稿（自筆稿本）、著書および勲章・顕彰状などを選んで展示しました。この展示を通して白川博士の学問と生涯の一端に触れ、多くの方々に「白川学」に関心を寄せていただく機会となりました。

この誌面を借りて、数々の貴重な御遺蔵品を惠贈くださった御遺族に改めて深甚の謝意を表します。

開催期間…二〇二〇年十二月十日（木）～十二月二十四日（木）
開催場所…平井嘉一郎記念図書館・一階ギャラリー

《展示の構成》

【手稿と著書】

①手稿「一般萬葉假名音韻 附甲乙未定字音韻」、手稿「古代國語音韻借音特殊假名 萬葉集」

仮名遣いや漢字による仮名表記の研究は、江戸時代の国学者の契沖・本居宣長が行い、宣長門下の石塚龍麿が『万葉集』の表音仮名例を集め、単語の仮名表記が一定の類をなすことが示された。上代の特殊仮名遣いの研究は、橋本進吉『古代国語の音韻に就いて』（昭和十二年講演、同十七年出版）などによって精密になったが、この二篇の手稿は、『万葉集』

の仮名表記を白川博士が青年期に独自に探求された成果であると思われる。本学平井嘉一郎記念図書館「白川文庫」所蔵の「〔古事記・日本書紀〕字音假字假名用例」四種」と同類の手稿であり、白川博士が日本の古代に関する研究を早くから進められていたことを知る資料である。

②手稿「支那古代の祭祀―禘祭考―」

白川博士が昭和十八年（一九四三）七月一日に提出された本学法文学部文学科漢文学専攻卒業論文で、審査員は白川博士の恩師橋本循先生と本田成之先生。橋本先生の墨書による審査報告書を付し、表紙の題署も橋本先生の墨書にかかる。この卒業論文は、古代中国の帝王の祭祀について論ぜられたもので、白川学の出発点というべき貴重な一点である。

③手稿「消夏漫吟 似而非詩二十首」

七言絶句の連作の手稿。「似而非詩（似て非なる詩）」とは、詩の体をなしていない詩という謙遜の意を表す副題である。白川博士は、短歌を詠まれることは比較的多かったが、漢詩の制作は稀であつたので、この手稿は甚だ貴重である。第一首「三十九年 一夢非なり」とあるので、数え年、三十九歳すなわち昭和二十三年（一九四八）の所詠と推測される（満年齢ならば翌年の作）。戦後の社会に目を向けられた作が少なくないが、そのうちの第九首は原爆の惨禍を詠われたもので、以下に、試みに書き下しておく（結句は、項羽の楚軍が新安で秦の兵卒二十余万人を地中に落として大量殺戮した故事の比ではない、極めて惨いことであるとの意）。

【第九首】

一閃空濛雲氣生	一閃 いつせん 空濛 くもう として 雲氣生じ
爆風加處霹靂轟	爆風 加わる処 霹靂 へきらい 轟く
無辜十萬瞬時没	無辜 むこ （罪のない人）の十萬 瞬時に没す
不比新安流血阮	新安流血の阮 あな に比せず

④ 白川博士謄写版『稿本詩経研究 通論篇』

中国の古代歌謡集『詩経』は、白川博士が若き日に、『万葉集』とともに接せられた古典である。博士は両者との出会いを契機に東洋の古代、古典古代に目を向け、学問の道を歩み出された。『詩経』の研究は博士の学問の重要な領域であり、本書は先生の主著のひとつである。『詩経研究』を通論篇・民俗篇・解釈篇・研究史篇・訳注篇の五部にまとめることを企図され、通論篇を大学院の博士課程、解釈篇を修士課程の講義向けに書き上げ、一九六〇（昭和三五）年に自筆の謄写版で刊行された。展示の通論篇は、後年の出版に際し、自ら朱訂を加えられた一本である。のち『白川静著作集10』（平凡社、二〇〇〇）所収。

⑤ 手稿「漢字字義系列分類」、『漢字の体系』（平凡社・二〇二〇）

『字統』（一九八四）『字訓』（一九八七）『字通』（一九九六）の字書三部作の後、白川博士は、「文字自身の体系に従って、文字構造の基本的な原理、またその体系的な展開の方法について論」（『漢字の体系』の「本書の編纂について」）じ、また文字学の聖典とされた『説文解字』に対する白川文字学的批判と方法論の相違を明確にすべく、新たな字書を編纂された。それが『漢字の体系』として二〇二〇年九月に出版を見た（序文にあたる「本書の編纂について」は、平成十八年四月九日 九十六歳の誕辰の日」の執筆）。『漢字字義系列分類』は、『漢字の体系』の素案的な原稿である。『漢字の体系』については、本誌の最終頁「白川静博士『漢字の体系』を参照されたい」。

⑥ 『興の研究』、『白川静提出学位請求論文審査要旨』

『興の研究』（『稿本詩経研究』別冊。のち『白川静著作集9』 平凡社、二〇〇〇所収）は、『詩経研究』民俗篇のうちの『詩経』の発想法についての特論である。白川博士は、これを博士学位請求論文として京都大学に提出され、一九六二（昭和三七）年に文学博士の学位を得られた。学位記ならびに学位請求論文審査要旨もあわせて展示した。

⑦ 手稿「續金文選収録目次」、『白川静著作集』別巻『甲骨文集・金文集』・『続金文集』（平凡社・二〇一九）

白川博士は、『殷甲骨文集』一冊（一九六三）・『金文集』全四冊（一九六四）を出版され（二玄社「書跡名品叢刊」所収）、その後、「釈文篇」に校訂と訓読文を加え、合冊本『甲骨文集・金文集』とされた。『続・金文集』は、『金文集』の続編として、前著未収のもの、またその後に出土した青銅器三五〇点の精拓影を選び、訓読文と略解を施されたものである。博士は最晩年に金文の研究にも心血を注がれ、『続・金文集』がその成果となった。手稿「續金文選収録目次」は、『続・金文集』編纂の準備段階の原稿である。『甲骨文集・金文集』、『続金文集』の刊行は、残念ながら御生前にならず、昨年となったが、これをもって平凡社『白川静著作集』本巻二二巻・別巻二〇巻の二〇年に及ぶ出版が完結した。

【各種の証書・表彰状】

- ⑧ 保育証書（福井市順化幼稚園）（大正六年（一九一七）三月）
- ⑨ 修業証書（福井市順化尋常小学校）（大正十二年（一九二三）三月）
- ⑩ 立命館大学法文学部 卒業証書（昭和十八年（一九四三）九月）
- ⑪ 学位記（昭和三十七年（一九六二）三月）
- ⑫ 朝日賞 賞状（平成九年（一九九七）一月）
- ⑬ 文化功労者 顕彰状（平成十年（一九九八）十一月）
- ⑭ 勲二等瑞宝章 勲章・勲記（平成十一年（一九九九））
- ⑮ 文化勲章 勲章・勲記（平成十六年（二〇〇四）十一月）
- ⑯ 京都市名誉市民表彰 表彰状（平成十七年（二〇〇五）十月）

以上



記念展示会場

漢字学研究会活動報告

副所長 大形 徹

キャンパスプラザ京都 大学院等共同サテライトにて研究会

第八十一回五月二十三日 「新出金文講読 以下新出」・佐藤信弥・韓伯

豊鼎

第八十二回六月二十日 「新出」・佐藤・韓伯・韓伯・韓伯 以下新出」・佐藤・韓伯・韓伯 以下新出」・佐藤・韓伯・韓伯

下読本」・安東麟・金文四祀卣其卣

第八十三回 七月十八日 「読本」・石川大我・周原甲骨文「研究発表」・

佐藤・媛鼎銘と西周期のジェンダー

第八十四回九月十九日 「読本」・安東・何尊「新出」・村上幸造・柞伯簋

第八十五回十月十七日 「読本」・安東・大孟鼎「新出」・村上・柞伯簋

第八十六回十一月十四日・佐藤・中国開催オンライン学会発表報告「新

出」・三輪健介・季姫方尊

第八十七回十二月十九日 「読本」・安東・大孟鼎「新出」・山田崇仁・呉

王余昧剣

第八十八回一月二十三日オンライン併用・「新出」石川・陶觥

第八十九回二月二十日オンライン併用・「講演」山本堯・鑄造技術から

みた殷周金文の製作とその特質・「新出」山田・呉王余昧剣

『漢字学研究』第八号（十月発行）

○追悼 佐藤武敏先生と殷周史研究会 末次信行 ○甲骨文通解 河南

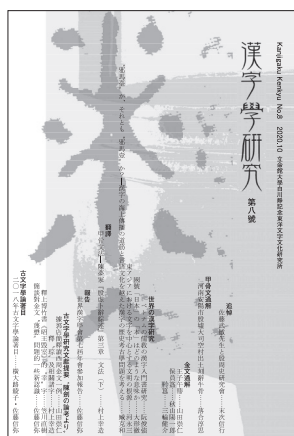
安陽隱居大司村出土刻辞牛骨 落合淳思 ○金文通解 ・王子牛鼎 山

田崇仁・保貝簋 秋山陽一郎・斚簋 三輪健介 ○世界の漢字研究・ベ

トナムの儒教漢字入門書研究 阮俊強・国号「日本」の「本」はどのよ

うな意味か 大形徹・東アジアにおける文字を中心とする文明の根源
 河永三・邪馬臺「か、それとも」邪馬臺「か？ 臧克和 ○翻訳・甲
 骨文法―陳夢家『殷墟卜辞綜述』第三章 文法（下）村上幸造 ○報告
 世界漢字学会第七年会参加報告 佐藤信弥 ○古文字学研究文献提
 要「陳劍の論考より」・挾郭店簡帛讀西周金文一例 山田崇仁・「琮」
 及相關諸字 村上幸造・「琮」上博竹書《昭王毀室》的「幸」字 笠川直樹・
 簡談对金文「蔑懋」問題的一些新認識 佐藤信弥 ○古文字学論著目・
 二〇一八年古文字学論著目 横大路綾子・佐藤信弥

（衣笠総合研究機構教授）



「漢字学研究」8号表紙



第八十八回研究会 佐藤信弥氏

日中韓漢籍研究プロジェクト

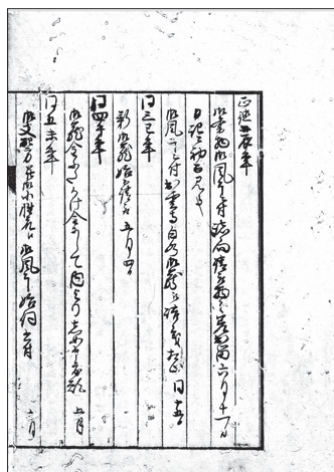
所長 芳村弘道

南京大学域外漢籍研究所と高麗大学校漢字漢文研究所との共同開催による学術会議「第七回東亜漢籍交流国際学術会議」が10月に南京大学において行われ、これに研究発表者や評論者を派遣して参加する予定であった。ところが疫情収束を見ず、南京大学がすべての国際会議の開催を見送る指示を出し、これを受けて八月に南京大学域外漢籍研究所が開催の延期を決定したため、残念ながら当第二研究プロジェクトの「日中韓漢籍研究」としての一つの大きな計画が本年度に実施できないこととなった。また研究所の三プロジェクト共同によるカザフスタン共和国教育科学省中央科学図書館珍本書庫収蔵の漢籍等の基礎調査も両国の疫情のために実行できなかった。

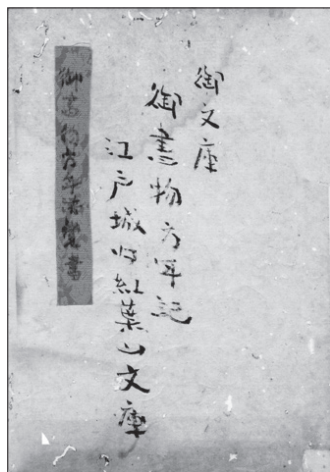
各大学図書館は学外者の閲覧を見合わせ、閲覧に公共図書館も制限を設けるところが多く、日本国内における漢籍、朝鮮渡り唐本の調査も思うようにならなかった一年であった。芳村は、陽明文庫と京都大学人文科学研究所の漢籍を調査し、また鎮静傾向にあった10月に東京に赴き都立中央図書館と国会図書館で閲覧調査を行う機会を得た。また韓国の成均館大学大東文化研究院が11月14・15日にZOOMオンラインによって開催した国際会議「東亜文献学的全視角—資料環流和書目収蔵」に参加し、一四日に「朝鮮渡り唐本の研究について」を発表した。斬春雨研究員は、非常勤講師先の同志社大学図書館の明版『五雜俎』を調査した。

昨年度末に研究所が購入した江戸幕府紅葉山文庫関係の写本資料『別本 御書物方年譜覚書』（下掲の図版参照）について、文学部の川崎佐

知子教授・中本大教授の両研究員と芳村が10月から解説を中心にした研究会を行った。それによって、この写本は、国立公文書館に所蔵される『御書物方日記』の欠佚を補い得る高い資料的価値を有することが判明した。その成果の一部を当研究所紀要の第十四号に掲載したので、高覧いただきたい。なお当該資料は運営委員の情報理工学部の前田亮教授に複製を依頼し、前田委員の指導を受けた大学院博士後期課程二回生の李康穎君が高画質の画像を作成し、これを研究に使用して便益を得た。こうした文理融合の研究事業を今後も行い、本資料など研究所所蔵の貴重資料の画像をインターネット上に公開し、広範な利用を図りたい。



同本の本文首葉表



『別本 御書物方年譜覚書』表紙

本プロジェクトの研究成果報告会を二〇二一年三月二〇日にZOOMオンラインで開催し、以下の報告が行われた。

住吉朋彦（慶應大學教授・学外研究員）「徳川家康の慶長御讓本について」

川崎佐知子「『別本 御書物方年譜覚書』について」

萩原正樹「和刻本『事林廣記』に見える詞について」

富嘉吟「松崎慊堂が見た宋元刊本について」

靳春雨「高青邱詩文集の刊行について」

芳村弘道「朝鮮渡り唐本調査報告」

最後にプロジェクトの主要な研究員の本年度の業績を以下に記しておく。

萩原正樹

【編著書】『日中韓文人交流と相互理解―明治大正期の詩詞を通して』（あるむ、二〇二〇年十一月）

【資料紹介】「近藤南州手記『詩餘』」（『學林』第七〇号、中國藝文研究會、二〇二〇年七月）

【書評】「人と文学にひたる喜び…『范成大詩選』」（『立命館アジア・日本研究學術年報』第一号、二〇二〇年六月）

【講演】「近藤元粹の詞学」（上海大学海外漢学家高端論壇 騰訊會議オンライン、二〇二〇年十一月一八日）

【学会発表】「近藤元粹の詞学について」（立命館大学アジア・日本研究所「日中韓詞学文化交流研究会」ZOOMオンライン、二〇二〇年十一月二九日）

富嘉吟

【論文】「いわゆる『晋宋奇談』について」（『汲古』第七七号、汲古書院、二〇二〇年六月）・「松崎慊堂の陶淵明受容について」石経山房本『陶淵

明文集』の刊行を中心に」（『日本中国学会報』第七二号、日本中国学会、二〇二〇年一〇月）

【学会発表】「石経山房本『陶淵明文集』の刊行について」（中国芸文研究会例会、本学衣笠キャンパス、二〇二〇年七月二六日）・「詩跡としての三郷の成立とその変遷―唐代から宋代まで―」（中唐文学会第三一回大会、法政大学、二〇二〇年一〇月九日）

靳春雨

【論文】「山口剛と詞―『槐南朱批』『梧桐雨』と『荷塘印影』を手がかりとして」（『學林』第七〇号、中国芸文研究会、二〇二〇年七月）

【学会発表】「日本における詞学（宋代の中国詩）の受容と研究」（第二六回「研究最前線セミナー」、立命館アジア・日本研究所、二〇二〇年十二月一五日）

【学会企画】「日中韓詞学文化交流研究会」（ZOOMオンライン会議、立命館大学アジア・日本研究所、二〇二〇年十一月二九日）

芳村弘道

【論文】「立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所所蔵の朝鮮本『選賦抄評註解刪補』について」（『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第一四号、二〇二一年三月）

【資料紹介】『別本 御書物方年譜覚書』（川崎佐知子・中本大と共著、『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第一四号、二〇二一年三月）

【講演】福井県白川文字学ゼミ公開講座「白川静の中国古代文学研究について―『楚辞』の「九歌」を中心に―」（Microsoft Teams会議、二〇二一年一月二六日）

【学会発表】「朝鮮渡り唐本の研究について」（韓国、成均館大学大東文化研究院国際会議「東亞文献學的全視角―資料環流和書目収蔵」、ZOOMオンライン、二〇二〇年十一月一四日）

日本文献研究プロジェクト報告

研究顧問 杉橋 隆夫

本プロジェクトでは、主に次の二つのテーマを柱として研究を進めて来た。

一つは上賀茂神社（賀茂別雷神社）が蔵する『賀茂旧記』（重文）に関する研究である。同神社の許可を得て、かつて杉橋研究室が入手した精細な写真を基に作成したフルテキストデータベースはほぼ完成の域に達し、今はその活用をはかる段階にある。

この方面では、二〇一九年九月に本学で開催された世界漢字学会第七回年会で、杉橋が「京都、上賀茂神社収蔵『賀茂舊記』の史料価値與分析視角」と題して報告し、翌年二月の当研究所研究成果報告会でも、上島理恵子「『賀茂旧記』全編数値化と解釈」と杉橋「『賀茂旧記』の史料価値と分析の試み」が発表された。

もう一つの柱は、近時飛躍的に公開の度が進んだ各種データベースを駆使して、和語・和字の世界（鎌倉時代後期に歴代神主の日記を纏めた前項の『賀茂旧記』は、緊密な関係を有する）と対比しつつ、わが国における漢語・漢字の変遷を追究する道筋である。成果の一部は今年度の『研究所紀要』第十四号に論稿「『かな』『まな』と『和字』『漢字』―北条泰時書状を手掛かりに―」が掲載される予定になっている。

最後に「付けたり」として、コロナ禍のために延期となったカザフスタン共和国における東アジア文献調査の件がある。調査対象は漢籍が中心となるが、日本の書籍・文献に関しては当プロジェクト担うことになるので、先々の実施に備えて器材・関連研究文献の収集などに努めている。

（立命館大学名誉教授）



研究成果報告会における杉橋報告



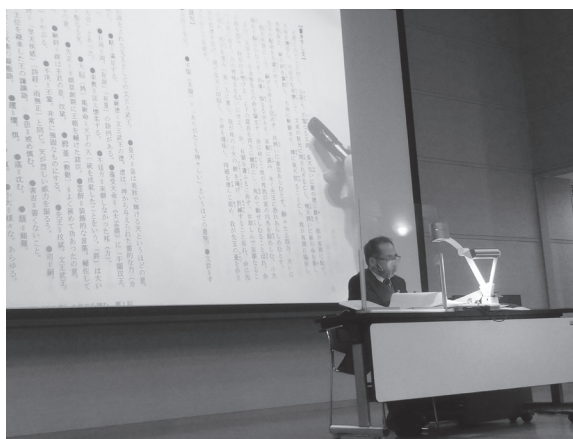
研究成果報告会における上島報告と司会の大形教授

「連続公開講座」の報告

客員研究員 高島 敏夫

西周時代の雄篇《大孟鼎》を三回に分けて読みました。書写も交えながら進めるという趣旨でしたが、二九一字の長文であるため所要所で書写の時間をとり、後は言葉の説明をする時間に当てました。銘文に、文王が天命を受けたことを述べる件がありますので、「殷周革命」についての説明にかなりの時間を割きました。《大孟鼎》は陝西省岐山県礼村の出土です。このあたりは古来「周原」と呼ばれてきた周族発祥の地で、西周王朝の故都でもあります。周原は青銅器が多数出土する土地として古くから知られていたのですが、近年、殷末周初の甲骨が出土したことで以前にもましてその重要性が高くなりました。講義では最近の発掘の動向にも言及しながら、周の故都「周原」のイメージを具体的に描いていただけるようにまとめました。難解な辞句の多い《大孟鼎》ですが、様々な話題を交えたことによって理解を深めて頂けたのではないかと思います。

(白川研究所客員研究員)



「連続公開講座」(第1回)の様子

教育活動報告(二〇二〇年度)

運営委員 後藤 文男

二〇二〇年度は、新型コロナウイルスの感染拡大で、初等・中等教育の現場も大きな影響を受けました。附属校の先生方で作る「白川式漢字学習法ワーキンググループ」(白川WG)の取り組みも、学校閉鎖による授業内容の変更や三密を避けるための教室での活動の制限などの影響で、十分な活動を行うことができませんでした。それでも、月一回の定例会をオンライン会議に変更するなどして、実践の交流や今後の展開について検討を続けてきました。以下、二〇二〇年度に取り組んだ実践について報告します。

(1) 漢字ワークシート『成り立ちとつながりで学ぶ漢字35(第三集)』の刊行

附属校での漢字教育の一助にと始めた授業教材づくりの第3集となるワークシート(参照写真1)を二〇二〇年六月に刊行しました。各附属中高の漢字教育の副教材として各学年で使えるよう第3集までの刊行を目標に取り組んできました。ようやく一区切りをつけることができました。今後は、附属校での実践をさらに旺盛に進めるとともに、広く「白川文字学に基づいた漢字学習法」を知ってもらうための基本教材として普及に力を入れていきたいと考えています。白川WGとしては、中高版が完成したので、二〇二一年度からは小学校で習う漢字を対象とした新たな漢字教材の開発に着手したいと考えています。

(2) 立命館小学校での「白川漢字」の導入と実践

二〇二〇年度から立命館小学校での漢字学習の中で「白川漢字」を

全学年で導入することを決定し、実践を開始しました。初年度の実践はコロナの影響で全面的に展開することはできませんでしたが、休校中（四月～五月）のオンライン授業の中で、2～6年生を対象に長谷川昭先生が「白川漢字」の授業を十二回行いました。入学直後一年生は、『漢字なりたちブック1年生（伊東信夫著）』を漢字学習の副教材として採用し、活用を始めました。また、例年多くの実践に取り組んでいる読書（一～四年生）の時間では、大橋輝子先生を中心に一年生三回、二年生四回、三年生三回、四年生六回の授業を行いました。二年生では十月に後藤による特別授業「弓矢の話他」を行いました。また、四年生は福井県が主催する「集まれ！私の漢字展」に初めて「古代文字の書」を書いて出品し、好評を得ました。（写真2）今年度の図書館の貸し出しの中で、『漢字なりたちブック（一年～六年）』の貸し出し数が四〇〇冊（二〇二一年二月現在）になりました。昨年度に続き、子供たちが日常的に古代文字や白川先生の漢字の成り立ちに強い関心を抱いているのがわかります。

（3）各附属校での主な取り組み

①立命館中学校

・二〇二〇年二月～中学一年生八クラスを対象に、後藤による特別授業「口（さい）の発見」を行いました。

・二〇二〇年二月～一月～福井県が主催する「集まれ！私の漢字展」に中学校書道部が「古代文字の書」を初めて出品しました。福井県での展示が終わった後、福井県の小学生の作品とともに、立命館小学校で合同展示を行いました。（写真2）

②立命館守山中学校

・二〇二一年二月～中学一年を対象に漢字の歴史と「ひょうたんから由」等を中心に「成り立ちとつながりで学ぶ漢字」の授業

を教職大学院の大学院生と合同で取り組みました。

③立命館慶祥中学校

・二〇二一年二月～中学2年生を対象に久保裕之先生によるオンライン特別授業「手の七変化」を行いました。

（4）その他の学校での取り組み

・二〇二〇年二月～立命館初芝中学校二年生を対象に久保裕之先生による「手の系統」の特別授業を行いました。

・二〇二〇年二月～大阪市立弘済小・中学校の生徒を対象に立命館守山の津藤純子先生と教職大学院の学生との「成り立ちとつながりで学ぶ漢字」の合同授業を行いました。若い学生たちを巻き込んだ実践が始まったことは今年度の収穫でした。



写真1



写真2

文化事業活動報告（二〇二〇年度）

文化事業担当職員 久保 裕之

体験型漢字講座「漢字探検隊」

二〇〇七年度より始まった「漢字探検隊」は、毎回一つのをテーマとして、座学だけではなく、見学や体験を通して漢字の成り立ちとそものとなった自然や文化を学習する体験型の講座である。二〇二〇年に入ってから。新型コロナウイルス感染症対策のため、各地で開催予定であったものが中止となり、京都と福島での開催ができたのみであった。現在の環境下でも継続開催ができるようにWebでの講座開催等を計画している。

地域	回数	日付	テーマ	タイトル	会場	参加者数
京都	63	2020・10・31	知識	漢字クイズ大会	福島市こむこむ館	130
京都	62	2020・12・6	篆刻	はんこを作ろう	立命館大学衣笠キャンパス	100
京都	63	2021・3・13	造形	古代文字おもちゃを作ろう	立命館大学衣笠キャンパス	30

「古代文字ダンス—古代文字之舞」の制作

白川静名誉教授（以下、白川静博士）の生誕一〇〇年記念活動の一つとして、「古代文字ダンス（古代文字之舞）」動画を制作した。「左右の巻」「手の巻」「足の巻」の三部で構成される本動画には、「見てみよう（鑑賞版）」と「やってみよう（実践版）」があり、一つの漢字について「ダンス」となえることば（漢字の成り立ちを簡単な文で覚えやすくまとめたことば）の流れで構成されている。

「古代文字ダンス」は、古代文字を身近なものとし、漢字の成り立ちやつながりについて、ダンスを通して「体感」することを目的としている。漢字の世界は、語源（成り立ち）と系統（つながり）があり、いろいろ

な漢字が密接に結びついている。そのため、漢字を学ぶ際にも、読む・書くにとどまらず、その原理を理解することが大切だと考える。白川研では「漢字探検隊」での「漢字ジェスチャー大会」で培ったノウハウと経験を活用した。

本動画は立命館グローバル・イノベーション研究機構（RGIBRO）客員研究員の増田晶子氏（校友）や一般社団法人司延子モダンバレエの協力により制作し、教育現場などでの活用を想定している。またいわゆる「巣ごもり」の生活を急に余儀なくされた環境下で、家庭での視聴も期待している。

学内他組織との連携事業

立命館附属校教員との白川文字学に基づく漢字教材制作ワーキンググループ（詳細は別稿に）も七年目を迎え、その研究出版である『成り立ちとつながりで学ぶ漢字シート35』の第三集を二〇二〇年五月に刊行、シリーズの完成となった。また初芝立命館中学校（大阪府堺市）への出張授業と立命館慶祥中学校（北海道江別市）へのオンライン授業を行った。



古代文字ダンス



2020年12月 第62回京都漢字探検隊「はんこを作ろう」

た。

社会人向け学習組織「立命館アカデミックセンター」では二〇二〇年十月にウェビナーによる「立命館オンラインセミナー 漢字探検隊―京都で味わう漢字の成り立ち」を開講した。

他の機関との連携

公益財団法人日本漢字能力検定協会（京都市）とは「漢字教育士」養成講座事業の受託を契機に、同検定受検者への当研究所の広報活動や情報交換等が活発に行われ、八〇〇名を数える「漢字教育士」の重要な輩出元となっている。産経新聞社（東京都千代田区）との共催で開催している「創作漢字コンテスト」は今年で第十一回を数えた。アンバサダーに名誉漢字教育士の武田鉄矢氏を迎え、応募者数は約二万六千通と過去最高となった。本コンテストは富国生命保険株式会社の特別協賛と株式会社Z会、株式会社社平凡社、株式会社モリサワからの協賛を受けている。放送大学大阪学習センター（大阪市）では同校の面接授業に「漢字字」を開講、八科目を修了すると「漢字教育士」資格が取得できる。

摩気高山こども未来塾（京都府南丹市）では、大ヒット漫画「鬼滅の刃」で見られる漢字をテーマに授業を行った。

自治体との関わり

福井県では小学校に「白川文字学」に基づく漢字教育を取り入れる政策を実施しており、県内に拠点校を設け、研修や学習会が開催されている。この取組はさらに中学・高校教育の領域へ広がりを見せている。二〇二〇年十一月には「ふくい町探検―白川博士ゆかりの地をたどる」の講師として招かれ、また「集まれ！『わたしの漢字』展」に附属校が出品参加した。他にも例年は「福井県白川静漢字教育賞」への協力や「漢字教育士研修会」への講師派遣を行ったりするなど、緊密な関係が続い

ている。

兵庫県の姫路市生涯大学校で開講中の「漢字学」は第五期生が入学、当初は四月であった開講は八月末に延期となったが、継続中。二〇二一年度には第六期生の開講も確定している。

東日本大震災復興支援活動「漢字で元気に」

「漢字で元気に」は、二〇一一年三月に発生した東日本大震災の復興支援活動の一つとして、年齢・性別に関わらず共通の話題にできる漢字・日本語を、家族をはじめとするコミュニティの交流ツールとなるように、そしてそこから生まれてくる絆の力を震災復興に向けられるように、さまざまな話題や知識を提供する活動を行おうとする試みである。二〇一一年一〇月に福島市と宮城県角田市とで活動を開始、岩手県を含めた三県で活動を行ってきた。二〇二〇年度では十月に福島市こむこむ館で規模を縮小し感染対策を講じた上で「漢字クイズ大会」を開催した。福島県での活動では福島大学・澁澤尚研究室の協力を仰いでいる。



2020年10月 第14回福島漢字探検隊「漢字クイズ大会」



2021年1月 集まれ！「私の漢字」展

「第十一回創作漢字コンテスト」の報告

研究顧問 加地 伸行

本研究所・産経新聞社共催の第十一回創作漢字コンテストへの応募総数は、過去最多の二万六一〇八点であった。その特色としては、小・中の場合、学校単位の応募が多く、担当教員の添付書簡にその熱意がひしひしと感じられたことは、ありがたかった。

毎年のことであるが、その年の流行を題材にする作品が多かった。すなわち今回はコロナである。しかし、コロナそのものを表す作品では、その特徴が乏しく平凡に終わる。けれども、コロナに因る現象を表わすと個性が出てくる。そうした諸作品の中で傑出した作品が最優秀賞の「座」であった。人と人との間隔をあけるソーシャルディスタンスを、「座」字中の「人」を少し動かすだけで表現したのは、お見事。印象的な入選作品は、小学生の「茜」（四葉のクローバー）、中学生の「画」（ノートパソコン）、高校生の「𩺰」（干し魚）であった。特に「画」は、文字そのものも美しく、審査員を唸らせた。

なお、応募者の範囲が海外へ広がり、ついに学校単位の応募があった。すなわち台湾の普台小学校からの応募作十四点である。その熱意と国際性の展開があったことを記念して、学校特別賞を贈り、「𨔵・𨔵・𨔵・𨔵・𨔵」の五、六年生の作品（左手・少年・二百・正方・休む）を引用した。そのほか、多くの楽しい作品が入賞しているので、詳しくは、産経新聞令和二年十二月二十四日付を見られたい。

一つの事業を始めて、それが軌道に乗り動けるようにするには十年を要するという常識通り、今やこのコンテストも諸学校に認知されてきている。

（大阪大学 名誉教授）

𩺰

干し魚

画

ノートパソコン

茜

四ツ葉のクローバー

座

ソーシャルディスタンス

𨔵

休む

𨔵

正方

𨔵

二百

𨔵

少年

𨔵

左手

十年目を迎えた「漢字教育士」の活動

文化事業担当 久保 裕之

二〇一一年度に創設した「漢字教育士」資格認定制度もまる十年が経過し、今では資格認定者が約八〇〇名を数えるようになりました。

「漢字教育士」とは、漢字の成り立ちや文化的背景、現代の漢字・日本語の状況を理解し、幅広い知識を有するとともに、「教える力」を身につけた方です。漢字の楽しさを知った方が、それを伝えることにより、世の中に漢字文化の種をまき、花を咲かせようという思いから、この資格は生まれました。日本の社会においては、漢字・日本語は老若男女にかかわらず広く使われる媒体です。「漢字教育士」の活動が、人々の交流を広げ、絆を強めるものになることを期待しています。

漢字教育士資格認定講座の方式は、①指定機関での指定科目の修了、②漢字教育士資格認定ウェブ講座の修了の二つです。

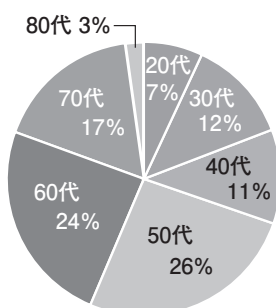
指定機関としては、放送大学大阪学習センターでの面接授業「漢字学」が毎学期開講されており、毎回関西地方をはじめとする全国からの聴講申込のある人気科目となっています。八単位取得が「漢字教育士」資格取得の条件となっており、その取得には最短四年かかりますが、地道に単位を取得して「漢字教育士」の取得をされた方も十一名いらっしゃいます。また姫路市生涯学習大学校では、二〇一六年度より二年コースの「漢字学」が開講しました。現在第五期生・第五期生併せて一一〇名の方が対面講座で学んでおり、これまでに十七名の方が試験に合格され、資格を得ています。

ウェブ講座は二〇一六年二月より立命館アカデミックセンターの直営講座の一つとして行われています。時間的・空間的制限がないのでな

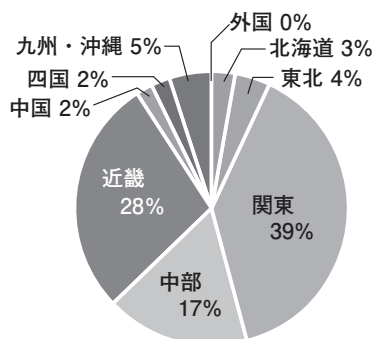
たでも受講でき、日本国内はもとより、海外在住の日本人・外国人の受講も増えています。また公益財団法人日本漢字能力検定協会（漢検協会）との提携も大きな成果を上げています。漢検協会は漢検受験で培った個人の漢字能力を社会に還元できる人材を育てようと「漢検漢字教育サポーター」制度を二〇一二年に創設、一級・準一級合格者からなる「漢検漢字教育ネットワーク」会員の中から毎年数十名の方が選抜されて本講座を受講しています。二〇一二年三月をもって第九期の受講が修了、四月からは第十期の受講が始まります。

漢字教育士は二〇一二年三月末現在七九九名で、その活動拠点は全国そして海外に広がっています。内訳は名誉漢字教育士二名（白川静博士と武田鉄矢氏）と特別認定者二名、課程修了による認定者七七六名です。そのうち、課程修了による認定者の内訳は左の表の通りです。

年代別統計



地方別統計



*白川静博士『漢字の体系』

待望久しい白川静博士の『漢字の体系』が二〇二〇年九月二三日に平凡社から刊行された。同社、前年の『白川静著作集』別巻の『甲骨文集・金文集』・『続・金文集』に続く出版である。これで白川博士が生前に刊行を期しておられた遺稿がすべて出版されたことになる。また本書は「立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所叢書1」としての出版であり、この叢書も本書をもつて一応の完結が見られ、まことに喜ばしい。

白川博士は、御逝去の年となった二〇〇六年の三月発行の小誌『白川研究所便り』創刊号に『説文学と白川文字学』（のち『桂東雜記V』平凡社、二〇〇七年四月九日）を寄稿され、末尾近くに「私は近く世に問う一書において、このふたつの方法を用いて、文字の形体学的研究の實際を解説したいと思う」と述べておられた。その「近く世に問う一書」が、この『漢字の体系』である。

本書は、「文字自身の体系に従って、文字構造の基本的な原理、またその体系的な展開の方法について論」（以下引用は本書冒頭「本書の編纂について」による）じ、また文字学の聖典とされた『説文解字』に対する白川文字学的批判と方法論の相違を明確にすべく、書き下ろされたものである。本書は二部に構成され、「第一部 百科篇」では、「文字が成立した時代の、自然や人文に対する認識の方法が、どのようなものであったか」を理解するために、文字創成時代の世界を「百科辞書的に六十数部に区分し」、「天象」以下の項目を立て、漢字を意味分類して解説している。「第二部 転注篇」は、「同じ声符をもつ系列語において、その意義が貫通しているか否かを検証し」、「説文解字」の字説の当否を定めるといった内容になっている。「説文学と白川文字学」に言及された「このふたつの方法」が、すなわち本書の二部構成で示されているのである。白川博士は、『漢字の体系』の「本書の編纂について」の末尾に「平成十八年四月九日／九十六歳の誕辰の日」と記された。そして、この年

六月十日に福井県教育委員会主催の講演「漢字の体系―転注の字」、九月十六日に京都市教育委員会・白川文字学に学ぶ会主催の講演「漢字の体系―漢字教育について」を行われた（両講演録は『桂東雜記V』所収）。後者は御逝去の十月三十日より約一ヶ月半前の講演であった。両次とも体力の衰え、体調不良のことを言い添えて講演を終えておられる。健康を損なわれた身を厭わず、本書に説かれた内容、特に第二部の「転注」について一般の方に解説する講演をされたのであった。博士の本書に注がれた思いの深さが切に感じられる。爾来、十四年にして本書が出版された。まことに感慨深いものがある。なお、早稲田大学の笹原宏之教授の御執筆による本書の書評が近刊の『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第十四号に掲載されているので、是非とも御一読戴きたい。

（芳村弘道）

書籍紹介

・『立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第十四号

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所、二〇二一年三月

・『漢字学研究』第八号

立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所、二〇二〇年十月

・『日中韓文人交流と相互理解―明治大正期の詩詞を通して―』

萩原正樹 編

あるむ、二〇二〇年十一月

・『不老不死…仙人の誕生と神仙術』

大形徹 著

志学社 二〇二一年二月

・『コーパスで学ぶ日本語学 日本語の語彙・表記』

小椋秀樹 共著

朝倉書店 二〇二〇年五月